

監禁と解放の力学 —— Keats の *Endymion* ——*

小 口 一 郎

ジョン・キーツ (John Keats) の『エンディミオン』 (*Endymion : A Poetic Romance*) は、主観世界に閉じ込められた精神の解放を求める旅を描いた壮大なアレゴリーである。主人公エンディミオンの女神探求の旅は監禁されているという漠然とした意識に付きまとわれ、彼はそれとは知らぬままに解放を求める。旅の途中にエピソードとして挿入された人物達の運命も、エンディミオンの願望の投影を受け、監禁状態から解放へというパタンを繰り返している。しかし、彼らが解放へと至る道は決して一様で平坦なものではない。そこには囲われた空間の外へ出て行こうという積極的な心理と、解放を装いながら実はより未成熟な方向へと退行して行こうとする心理がないまぜになっているからである。こうしてみると、我々はこの作品の結末におけるエンディミオン自身の達成についても問い合わせざるを得なくなる。

本論はまずエンディミオンの探求行為そのものが主観世界の牢獄からの自我の解放の試みであることを論じ、統いてこの作品の見かけ上の解決が実際はロマン派的探求の道程を実現し得てはいないことを明らかにするものである。

I

そこが如何に閉じられた世界であろうとも、楽園的空間にいる者にとって監禁の意識などは存在しない。監禁の意識が生じるためにはそれまで均質であった空間が内と外に分割されること、空間的意味に差異化がもたらされること、すなわち何らかの意味で原初の楽園的世界に “fall” が起ることが必要である。第一巻冒頭に描かれたエンディミオンの王国ラトモス (Latmos) は天上樂園ではないものの、牧歌的雰囲気に満ちたアルカディア的理想郷である。そこには監禁意識を生じさせる内部、外部の区別は存在しない。折しも場面は牧神パン (Pan) の祝祭である。そこでパンがたとえ「全宇宙の知識に通じる神秘の扉を開ける恐ろしき者」 “Dread opener of the mysterious doors/Leading to universal knowledge” (I, 288-89)¹ と呼ばれ、「孤独な思いのための想像も及ばぬ庵」 “the unimaginable lodge/For solitary thinkings” (I, 293-94) と讃えられ、見知らぬ外部への案内者とされようとも、全ては祝祭の雰囲気に呑み込まれ、パンという絶対者の存在の中へと外部性が解消されていくことによってアルカディア的空间の均質性は保証されている。

エンディミオンはこのようなラトモスのあり方と際立った対照を成す。その登場の瞬間から彼

は既に墮ちている。「彼の顔には微笑が浮かび、」“A smile was on his countenance”(I, 175) 一見「樂園の木立の中、無為を夢見ている人」“one who dreamed/Of idleness in groves Elysian”(I, 176-77) のようでありながら、よく見るとその口許には「姿を見せぬ苦惱」“A lurking trouble”(I, 179) が伺われる。見かけのエンディミオンと眞のエンディミオン、すなわち彼の外観と内面は乖離し、その憂鬱と相俟ってラトモスの樂園性を損なっている。不調和はエンディミオンと彼の周りに集う人々の間にも持ち込まれ、彼はかたくなに目を閉じ、精神が内向しているために周囲の人々や出来事に一切意識を向けることができず隔絶している。隔絶は妹ピオーナ(Peona)との対面において極まり、遂に一度は彼女をして兄に対する語りかけを諦めさせてしまうに至る。ピオーナは「口に出された言葉は全て失われ、聞かれることなく、無益に終るであろうことを感じ取っていたため、返答を嫌った」“the maid was very loth/To answer, feeling well that breathèd words/Would all be lost, unheard, and vain”(I, 711-13) のであるから。かくして、エンディミオンは憂鬱という周囲の人々とは異なる心性を持ったこと、そして強度の内向性に陥ったことによってラトモスの空間を自我と非自我、内部と外部とにくっきりと切り分けるのである。²

上述のように “fall” を自己充足したアルカディア的空间の崩壊だとするならば、“fall” を引き起こすのは「過剰なもの」の侵入であると言うことができる。過剰なものはそれまで確固として定まり静止した秩序に、そこには抱摑し切れない部分をもたらすことによって秩序の完全性を破壊し、絶えざる流動状態へと導く。過剰なものは既存の体系を越えた見知らぬものであり、形象として表わされれば境界の向う側にある外部である。このような性質を孕む過剰なものとは不可知であり、指示すべき言葉を持ち得ないため、それまで一体一の充足した対応関係を持っていた樂闘的な言語の秩序を搖るがすのである。

エンディミオンの話の中で物語られる女神との邂逅はまさに過剰なものの体験に他ならない。その出会いの直前から既に彼は不思議な光景を目にし始めている。

There blossomed suddenly a magic bed
Of sacred ditamy and poppies red
At which I wondered greatly, knowing well
That but one night had wrought this flowery spell ;
And, sitting down close by, began to muse
What it might mean. Perhaps, thought I, Morpheus,
In passing here, his owlet pinions shook;
Or, it may be, ere matron Night uptook
Her ebon urn, young Mercury, by stealth,
Had dipt his rod in it—such garland wealth

Came not by common growth. Thus on I thought,
 Until my head was dizzy and distraught.
 Moreover, through the dancing poppies stole
 A breeze, most softly lulling to my soul,
 And shaping visions all about my sight
 Of colours, wings, and bursts of spangly light,
 The which became more strange, and strange, and dim,
 And then were gulfed in a tumultuous swim.

(I, 554-71)

要約すれば、エンディミオンはまさに「見知らぬ」("strange") 状況に出くわしている。彼は花薄荷や罌粟が突然開花するという不思議な光景に驚き、この稀なる成長の意味に思いを巡らすが、結局混乱に陥ってしまう。そして、彼の眼前では感覚を麻痺させる風の作り上げた数々の幻影が次第にその見知らぬ性質を増していく。

過剰体験に特有な見知らぬという性質や不可知性は、未知の女神との出会いにおいて更に繰り返し示される。女神は彼の認識できる世界を越えた存在であるため、彼女を語る言葉を持たない。彼にできるのは疑問文の反復によって驚きを表現することである。

Whence that completed form of all completeness?
 Whence came that high perfection of all sweetness?
 Speak, stubborn earth, and tell me where, oh where,
 Hast thou a symbol of her golden hair?

(I, 606-9)

あるいは否定辞を連ねることによってネガティヴに彼女の正体を規定しようとすることだけである。

Not oat-sheaves drooping in the western sun ;
 Not—thy soft hand,...

 Her pearl-round ears, white neck, and orbèd brow;
 The which were blended in, I know not how,...

(I, 610-11, 616-17)

「彼女の髪は全くゴルディアスの結び目のように編まれていた。」 "they were simply gordianed up and braided" (I, 614) という描写も、彼女の正体が根本的に解き得ぬ、見知らぬものであることを意味していると解釈できる。

見知らぬものの出現と相前後して、空間形象のレベルにおいてこれまでエンディミオンが考え

及ばなかつたであらう外部というものが生成し、境界形象を挟んで内側と外側とが截然と分割されたことが見出せる。女神との出会いの直前、星空を眺めていたエンディミオンには「天空の扉が開かれたように見えた。」“the doors/Of heaven appeared to open.” (I, 581-82) 扉という明らかな境界形象を挟んでこちら側と天空の向う側とに空間は分割されている。また、月は境界形象である「開いていく雲」“opening clouds” (I, 591) の向う側から表われ、続いて「雲の天幕」“vapoury tent” (I, 597) の向う側へと姿を消す。

これら一連の出来事の後、エンディミオンは憂鬱に落ち込む。天も地も快活な色合を失くし、「奥深い樹陰は底知れぬ牢獄となった。」“deepest shades/Were deepest dungeons.” (I, 692-93) 彼の周囲の風景は憂鬱で有毒なものへと姿を変える。

...heaths and sunny glades

Were full of pestilent light ; our taintless rills
Seemed sooty, and o'er-spread with upturned gills
Of dying fish ; the vermeil rose had blown
In frightful scarlet, and its thorns out-grown
Like spikèd aloe.

(I, 693-98)

この状況から、彼は「世界の暗い果への旅」“pilgrimage for the world's dusky brink” (I, 977) 言い換えれば外部へと出ていく解放の旅を企てる。更に、第二巻に至ると一匹の蝶がエンディミオンを導き、これから外の世界を旅しなければならない彼の運命を語る。

...thou must wander far

In other regions, past the scanty bar
To mortal steps, before thou canst be ta'en
From every wasting sigh, from every pain,
Into the gentle bosom of thy love.

(II, 123-27)

予告された放浪へとエンディミオンが旅立つ直前、我々は再び監禁と解放のダイナミックな運動を目撃する。蝶によって導かれて行った後でも、やはり彼は閉じ込められた状況にある。

...for me,

There is no depth to strike in. I can see
Naught earthly worth my compassing,...

(II, 160-62)

そこで、自らの求めている女神であるとは知らぬまま、月の女神シンシア (Cynthia) に飛翔させてくれるようにと祈り願うや否や、彼には「私の魂を閉じ込めている障壁が碎け散った」“the

bars/That kept my spirit in are burst” (II, 185-86) 様に思える。その時、それまで閉塞していたはずの空間は「何と深い世界であることか」 “The world how deep!” (II, 188) と感じられ始める。エンディミオンは結局上へと飛翔するのではなく、地下界へと下降してこの場の閉塞性から逃れていいくことになるのだが、このことは「降りよ」 “Descend” (II, 202) という声に促されたばかりではなく、この地に留まる事自体が絶えられなくなつたからでもある。

...he fled

Into the fearful deep, to hide his head
From the clear moon, the trees, and coming madness.

(II, 216-18)

過剰体験によるアルカディア的空间の変質は狂氣をもたらす程のものであったため、その閉ざされた障壁の一部が崩れるとエンディミオンは恐怖も顧みず下方に開いた外部空间に身を任せたのであった。

監禁と解放を伴うエンディミオンの探求の旅の最終的な意義はいわゆる “Pleasure Thermometer”³ の詩行を解釈することによって得られる。第一巻の777行目から60数行に渡って続くこの詩行は快楽に関するメタフィジックスを論じておらず、内容上二つに分けられる。まず最初に取り上げられているのが本質との交わりである。

Wherein lies happiness? In that which becks
Our ready minds to fellowship divine,
A fellowship with essence, till we shine
Full alchemized, and free of space.

(I, 777-80)

我々はこの一節が事物に存する本質との交流を意味していると解釈する。⁴ 事物の本質との共感的な交流は主觀に閉じ込められた我々を解放し、エンディミオンの言によれば幸福感を伴い、我々を「一種の全一感」 “a sort of oneness” (I, 796) へと誘ってくれる。しかし、これよりもさらに強調されているのはこの一節に続くもう一つの体験の様式である。

But there are
Richer entanglements, enthralments far
More self-destroying, leading, by degrees,
To the chief intensity : the crown of these
Is made of love and friendship.

(I, 797-801)

引用に続く詩行を読んでも「愛と友情」 (“love and friendship”) が具体的にどのような効果を持つのか、判然としないが、確かなことはこの関係のあり方が前に述べられた事物の本質との交

流よりも一段と高められたものだということである。両者とも自我を越えて外界と共感的関係を結ぶ行為を意味しているが，“A fellowship with essence”と“love and friendship”という言葉から明らかなように、後者は前者とは違って他なる人間存在との交流を意味している。⁵ 事物との交流を図ることも未知の領域に自らを開いていくことではあるが、他なる人間存在との交流はそれよりもさらに一層未知で不可解な外在者と関わることであり、エンディミオンがこの二つを区別して語っている通り、その程度においてより高次で根本的な関係のあり方である。言い換えれば他者とは単なる事物とは異なって自己の意志とは別の一つの意志を持ち独立して行動するものであるが故に、それとの共感的関係はより高度に「自己滅却的」（“self-destroying”）でなければならず、実現した暁には「より豊かな関わりあい」（“Richer entanglements”）となるのである。我々はエンディミオンに倣って事物の「本質との交流」と「愛と友情」の区別を敢えて強調し、自己の存在を超えた根本的に不可知な領域である他者との交流関係を「他者への超越」と呼んでおくことにする。

『エンディミオン』の文脈からして、この快樂のメタフィジックスの言及するところがエンディミオンの究極の目的であることは疑い得ないので、我々は「愛と友情」こそがエンディミオンの探求行為の意味であると考えることができる。よってこの詩の基本的な構成は、過剰体験によって周囲との関係を断ち切られ、自我あるいは主観の牢獄のなかに閉じ込められたエンディミオンがその閉域を越えて、不可知で外部的な他者との交流を目指す探求の旅に出るという図式に要約される。

他者が空間における外部と一致することは女神が現われた位置によって証明される。既に触れたように女神と出会い直前、月は雲という境界の向う側、すなわち外部に見出された。見知らぬ女神の正体は月の女神シンシアであることが後に判明するのであるから、この場における月の位置は他者の位置を示していたことになる。また、二度目の邂逅において女神は井戸の水面という境界形象の向う側に見出されている。

The same bright face I tasted in my sleep,
Smiling in the clear well.

(I, 895-96)

更に、不可知で到達し得ないという共通点において奈落や深淵が外部と同様な意義を持つとすれば、⁶ 第二巻においてエンディミオンが交わった「見覚えある未知の者」「known Unknown」も他者は外部であることを表わしていたと言える。なぜならばその出会いの最中彼女は最も深い深淵として彼に意識されるからである。

Now I have tasted her sweet soul to the core
All other depths are shallow. Essences,
Once spiritual, are like muddy lees.

(II, 904-6)

第二巻、第三巻、第四巻を通じて描かれるエンディミオンの放浪は、以上のような意味を担った長大な探求の旅なのである。

II

地下世界、海中世界、天空と一見エンディミオンは未知の領域を次々に切り開いて旅して行くかに見える。しかし、ラトモスという最初の牢獄を脱したとはいえ、あの「見覚えある未知の者」とのごく短い交流を除けば、彼の状況はラトモスで苦悩していたときのそれと根本的には変わっていない。地下界に入った当初の不思議な光景が醸し出す驚異の念が過ぎ去ってしまうと、「死ぬほどの孤独」“The deadly feel of solitude”(II, 284) が募り、かつてラトモスで目にした風景との「親しい交流から遠く離れて、見知らぬ時を過ごすこと” “far from such companionship to wear/An unknown time”(II, 291-92) が彼の運命となる。いかに放浪を続けようと、「見覚えある未知の者」に対して持ったような他者体験、深淵体験を再び獲得しない限りは、彼はいつまでも主觀の牢獄に閉じ込められたままなのだ。対話より独自、他者からの返答よりも自らの声のこだまが彼には似つかわしい。

“No!” exclaimed he, “why should I tarry here?”

“No!” loudly echoed times innumerable.

(II, 295-96)

また、第二巻における地下界がエンディミオンを取り囲む牢獄的イメージであるのは言を待たないうえに、第三巻の海中世界も上下左右を水魂で取り囲まれた巨大な牢獄である。

He saw the giant sea above his head.

(II, 1023)

Far had he roamed,
With nothing save the hollow vast that foamed
Above, around and at his feet....

(III, 119-21)

エンディミオンの辿る道筋は定まった行く先もなく、常に迷い、行き暮れ、しかも彼のいる空間の果ては見極められることがない。ピラネージ (Giovanni Battista Piranesi) の牢獄画を論じたプーレ (Georges Poulet) の言葉を借りるならば、第二、第三巻においてエンディミオンを囲繞する空間は、空間を奪い取るのではなく過剰に与えることによって人を閉じ込める、迷宮という名の無限の牢獄なのである。⁷

エンディミオンの放浪の途中に挿入された幾つかのエピソードも監禁から解放へという運動を辿り、本筋の展開を予表している。したがってこれらはエンディミオンの願望を投影された形で実現していると言える。例えばヴィーナス (Venus) とアドニス (Adonis) が登場するエピソー

ドにおいては、「銀梅花の木が壁となり、上方高く樹陰を成している一室」“A chamber, myrtle-walled, embowered high”(II, 389) という囲われ閉ざされたあずまやが出発点となる。アドーニスは冬の間中「この静かな場所の中、人目に煩わされることなく」“safe in the privacy/Of this still region”(II, 479-80) 眠りという閉ざされた世界に留まっている。ヴィーナスはそんな彼の解放者としてこのあずまやの外側から到来し、閉ざされていた空間の上方を開放する。

...when lo! the wreathèd green

Disparted, and far upward could be seen

Blue heaven, and a silver car, air-borne.

(II, 516-18)

エンディミオンの眼前で、ヴィーナスはアドーニスの目を覚まし、再会を果した二人は開け放たれた地の裂け目から上方へと飛去って行く。

High afar

The Latmian saw them minish into naught,

And, when all were clear vanished, still he caught

A vivid lightning from that dreadful bow.

When all was darkened, with Aetnean throe

The earth closed.

(II, 581-86)

ヴィーナスという他者によって無意識の眠りから解放され、この他者と結び付くことによって上方へと、そして外へと出て行くアドーニスは、エンディミオンの願望をほぼ完全な形で実現していると言える。故にエンディミオンはアドーニスの運命に己の未来を読み込み、「耐え忍んだ物全てが、大きな報奨に比べたら羽毛のごとく軽いものに過ぎなくなる時が来ることを確信したのだった。」“He felt assured/Of happy times when all he had endured/Would seem a feather to the mighty prize.”(II, 590-92)

しかし、アドーニスは正しい意味でエンディミオンの目標すべき姿を予表していたのか、ということに我々は疑問を持たざるを得ない。アドーニスの覚醒は自ら進んで行なわれたものではなく、ヴィーナスの与える刺激に反応し「不快そうに」“uneasily”(II, 522) 寝返りを打つことから始まった。また、もしヴィーナスという次なる庇護者が存在しなければ、これも哀れな努力に過ぎないであろうことが仄めかされている。

Ah, miserable strife,

But for her comforting! Unhappy sight,

But meeting her blue orbs!

(II, 529-31)

不快を顧みず彼が目を覚ましたのはヴィーナスの懷に迎え容れられることが前提となっていたのである。

ノイマン (Erich Neumann) によれば、神話上のアドーニスによって表わされる自我の発達段階は発生初期にあり、ともすれば再び圧倒する無意識に呑み込まれて消失してしまう程度のものに過ぎない。⁸ アドーニス的的人物像は無意識の象徴である太母の愛人となるが、彼女に対抗するだけの強さと独立性を未だ持ち得ないため、結局は死ぬことによって彼女に屈し、むさぼり食われることになる。ノイマンの理論を『エンディミオン』のアドーニスに当てはめれば、彼もやはりその命運をヴィーナスという太母の掌中に握られた弱々しい自我であるに過ぎない。覚醒から上空への旅立ちに至るまで彼は何ら自発的意志を見せず、状況とヴィーナスの意向の成すがままに行動するのみである。このヴィーナスへの服従ぶりからみて、彼が発生初期にあるばかりか太母の中に退行していく自我を表わしていることは間違いない。恐らくは上空へ出ていった後、アドーニスはヴィーナスに吸収され消失していく運命にあるだろう。一見したところ他者への超越を体現するかのように振る舞いながら、彼が向うのは他者ではなく未分化な無意識の状態へ、すなわち太母に再び監禁されていくことだったのである。エンディミオンがこのエピソードによって励まされ、そこに自らの願望成就の予表を見いだすのであれば、彼もまた退行という危険な監禁状態へ向う心理を持つと言える。これに続くアルフィーアス (Alpheus) とアレシューザ (Arethusa) のエピソードにおいて、エンディミオンは太母的な女神ダイアナの力によって愛の成就と解放への試みが失敗に終った例を目撃する。しかし、太母の両義性が同時に意識され、退行を望む心理の危険性が対象化されて描かれるのはグローカス (Glaucus) のエピソードにおいてである。我々は第三巻に進まねばならない。

グローカスの半生はエンディミオンのそれと並行し、ニンディミオンの探求の危険な側面を映し出している。エンディミオンにとってラトモスが留まるに耐えられない場所となり、地下界へと降りて行ったのと同様に、グローカスは浜辺での生活に憂鬱を感じ、広い海中世界へと飛び込んで行った。彼にとってまさに「それは自由だった」 "Twas freedom" (III, 391) のである。最初彼は他者の存在であるシーラ (Scylla) へ心を向けたが果たせず、苦悩の中太母的存在のサーシ (Circe) に身を任せることになった。⁹ サーシのあざまやの中に捉え込まれた彼は幼児の段階にまで退行し、その生は停滞する。

She took me like a child of suckling time,
And cradled me in roses. Thus condemned,
The current of my former life was stemmed.

(III, 456-58)

しかし、グローカスがアドーニスと違っていた点は、最終的に太母の恐ろしい面を認識できたことである。サーシが醜い生き物たちを弄んでいる光景を目にし、彼女の正体を見極めた途端

「見せかけの楽園は本物の地獄へと変貌した。」“specious heaven was changed to real hell.”（Ⅲ，476）至福のあずまやはいわば牢獄と化し、グローカスはサーシの許からそしてこのあずまやから逃亡を企てる。

しかしながら、やはりグローカスもこの時点では太母の影響を完全に逃れ得るほどの独立した意識ではなかった。彼の企てはサーシに立ち向かうことではなく、ただ逃げようとするだけである。そして、その方向が「あの野生の森の牢獄のような中心へ、」“Into the dungeon core of that wild wood”（Ⅲ，565）すなわち、女性的なものや無意識の闇を意味する森の方向であることからも明らかのように、¹⁰ 彼の逃亡は逃亡には成り得ておらず、むしろサーシの領域に入っていくこと、すなわち再び彼女に捕え込まれようとする行動であったに過ぎない。いわば太母サーシによって去勢され¹¹、彼は醜く老いた肉体と海中の孤島という二重の牢獄に閉ざされ、残り千年の人生を生きなければならなくなってしまった。孤島上の彼は圧倒的な無意識の海に取り囲まれた弱々しい自我の姿を表わしている。ただし、エンディミオンの到着が解放をもたらしたことから、この巻では最終的には太母の方は振り切られているということはできる。したがって、アルフィーラスとアレシューザ、そしてグローカスとエピソードを経るにつれ、無意識と自我の力動的関係に対する認識は高まりを見せていることは確かである。

だが、エンディミオン自身の他者との関係は第四巻に至ってもなお十分ではない。インドの乙女という愛情の対象を見出したにもかかわらず、彼の心はともすれば自分自身へと向い、自我という閉域を打ち破れずにいる。冒頭でインドの乙女が悲嘆に暮れているのを聞いたエンディミオンは、彼女に愛を向けるために「彼の緑の樹陰を飛び出して」“sprang from his green covert”（Ⅳ，101）彼女の樹陰に入っていく。それは「あなたのあずまやの尊厳を侵す」“violate thy bower's sanctity”（Ⅳ，106）という境界を越え、他者の領域へと参入して行く空間的移動だったはずである。しかし、彼女に語りかけているうちに話題は専ら自分自身の苦境に集中し始め、ついには逆に彼女の同情を請うようになる。倒錯的なことに、「あなたの連れにならないのは大変な罪となることでしょう」“Methinks 'twould be a guilt—a very guilt—/Not to companion thee”（Ⅳ，134-35）と言うのはエンディミオンではなくインドの乙女の方なのである。

エンディミオンの最後の冒険は天馬に跨がり天空を翔けることである。そこで彼は月こそがその求めて止まなかった女神であったことを発見する。

“Tis Dian's. Lo!

She rises crescented!” He looks, 'tis she,
His very goddess.

(Ⅳ, 429-31)

しかしながら、我々はここにおいても月の女神とエンディミオンの間には距離があることを強調

しなければならない。彼は、その努力にもかかわらず女神へと至ることができないのだ。

Then doth he spring

Towards her, and awakes—and, strange, o'erhead,
Of those same fragrant exhalations bred,
Beheld awake his very dream. The gods
Stood smiling, merry Hebe laughs and nods,
And Phoebe bends towards him crescented.
Oh, state perplexing! On the pinion bed,
Too well awake, he feels the panting side
Of his delicious lady.

(IV, 433-41)

女神に向って跳ぼうとした瞬間彼は目覚め、出会いは繰り延べられる。そしてフィービーが彼の方にかがみ込んできた時、彼は傍らにインドの乙女の存在を感じ、深刻なジレンマに陥ってしまう。つまり上記の引用だけでも出会いは二度繰り延べられている。彼がジレンマを解決できぬ間に、月は彼の目の前から遠ざかり結局ここでも出会いは果たせなかった。“Slowly she rose, as though she would have fled.” (IV, 503) 加えてインドの乙女までもが彼の眼前から消え去つて行く。

Straight he seized her wrist ;
It melted from his grasp. Her hand he kissed,
And, horror, kissed his own....

(IV, 508-10)

彼女の手にキスするという対他者愛の行為は、彼女の消失によって自らの手にキスをしてしまうという恐ろしい自体愛 (auto-eroticism) の円環的行為に姿を変え、彼を自我の内に閉じ込め続けるのである。¹²

他者へ到達することなく地上へと帰還した彼はもはや境界の向う側に存する他者に至ろうと努力することを止め、これまでの探求の旅を否定する。

I have clung
To nothing, loved a nothing, nothing seen
Or felt but a great dream !

(IV, 636-38)

そればかりか、彼はラトモスの人々からも離れ、インドの乙女と二人だけで「黒ずんだ木薦が我々二人を匿ってくれる、陰しく苔むした丘の頂きの下」“Under the brow/Of some steep mossy hill, where ivy dun/Would hide us up” (IV, 670-72) に引き籠ってしまおうとする。しかし、

他者への志向を諦めた彼に、インドの乙女という他者が与えられるはずもなく、結局彼女にも同行を断わられ、彼の世界は彼一人だけの孤独な最小の空間にまで縮まる。いわば彼の精神は、第一巻のピオーナとの対面以前の、完全に閉ざされた状態に戻ったのである。

かくして、彼の探求の旅は外側の他者へと至ることに成功しないまま一つの閉じた円環を描き切ったのであった。女神を求めて、彼は地下界、海中界、そして天空を旅して周った。しかし「見覚えある未知の者」との一時の出会いを除いては外側の他者と相えることなく、自己の内側に閉じ込められたままだったのである。女神との再開を果せず、憂鬱に陥り、病的なまでに内向的でラトモスの他の住人からも隔絶した彼の状況は、出発点である第一巻のそれと何ら変ってはいない。彼の帰還は根本的に変化のない彼の自我へと戻ることであり、より高められた無垢の状態へ回帰するという、ロマン派に特有な上昇螺旋の円環には成り得ていないのである。¹⁸

III

以上の議論の帰結として、我々はこの詩の結末におけるエンディミオンとシンシアの再会、合一場面を虚偽の解決と見なさざるをえない。この場面が余りにも唐突であることに加えて、我々はエンディミオンのこの最後の行為が、彼の目指した他者への超越には成り得ていないのを読み取ることができる。まず、この場面の主導権はシンシアに握られ、エンディミオンは何ら自発的意志を示さず、彼女に付き従うだけだという事実がある。このことから、我々がヴィーナスに柔順に従ったアドニスに推測した危険が想起される。つまり、エンディミオンのこの後の運命もまた、完全な対他関係を結ぶのではなく、アドニスのように太母的存在の中に消失していくことになるかもしれないである。

エンディミオンとシンシアの合一場面の描写もこの二人の関係の不完全さを物語る。

"Peona, we shall range

These forests, and to thee they safe shall be
As was thy cradle. Hither shalt thou flee
To meet us many a time." Next Cynthia bright
Peona kissed and blessed with fair good night.
Her brother kissed her too and knelt adown
Before his goddess in a blissful swoon.
She gave her fair hands to him, and, behold,
Before three swiftest kisses he had told,
They vanished far away!

(IV, 993-1002)

ここには森の中へ消えて行くこと以外、特筆すべき空間的運動は描かれていない。我々がエンデ

ィミオンの願望充足の投影であると論じたアドニスとヴィーナスの話は、彼らが最終的に空へ、今いる空間を越えて上へと出て行くことで終っていた。さらにアルフィーアスの願望もまた上方へと飛翔して解放されることにあった。

Dear maiden, steal
Blushing into my soul, and let us fly
These dreary caverns for the open sky.

(II, 985-87)

また、語り手によれば、天空へ飛翔していくことはエンディミオンの目的でもあったはずだ。

Endymion! Unhappy! It nigh grieves
Me to behold thee thus in last extreme—
Enskied ere this but truly that I deem
Truth the best music in a first-born song.

(IV, 770-73)

ところが、第四巻の最終場面において、「天に昇る」("Enskied") ことは全く言及されていない。むしろ二人の赴く方向はあのグローカスを捕えた無意識の森の方向である。つまりここで描かれているのは物語を閉じるための便宜的な再会と合一であり、エンディミオンとシンシアのそれに当然伴わなければならないはずの、ある空間から境界を越えて外部へ、そして上へと昇ること、すなわち超越は実現していないのである。

過剰体験によってラトモスの閉塞性を意識したエンディミオンはより広い世界へと歩み出していく。しかし、彼の行き先はいたる所広大な牢獄であった。他者との接点を持ち得ない彼は主観の牢獄に、己の存在の深みに迷うしかなかった。故にこの詩に結末は存在しない。物語を閉じようとする意志は強引に解決場面を作り出しあはしたが、同時に当初の企てであった他者への超越の要素を剥奪し、結果としてエンディミオンは解放へと至るどころか再び太母の中に捕えられ監禁されしていくのである。¹⁴

注

* 本稿は拙論「超越の限差し——*Endymion* から “The Fall of Hyperion” へ——」『IVY : The Nagoya Review of English Studies』第21巻(1988), pp. 103-22の議論の補完を成し、一部重複する部分があることをお断わりしておく。

1 テキストはMiriam Allott ed., *The Poems of John Keats* (London : Longman, 1970) に拠る。

2 ロマン派における自意識への失墜については Northrop Frye, *A Study of English Romanticism* (Sussex : Harvester, 1968), pp.17-18参照。

3 これはキーツが手紙の中で使用した言葉である。Hyder Edward Rollins, ed., *The Letters of John Keats : 1814-1821*, 2 vols. (Cambridge, Mass. : Harvard Univ. Press, 1958), I,

218参照。

- 4 テューヴソンは、“a fellowship with essence”を主観という牢獄を越えて客観的実在を抱えようとする試みの一例であると考える。その背後にはロック以来の認識論がある。Ernest Lee Tuveson, *The Imagination as a Means of Grace : Locke and the Aesthetics of Romanticism* (1960; rpt. New York : Gordian, 1974) p.109参照。
- 5 「愛と友情」を他の関係の様式と特に区別することについては James B. Twitchell, *Romantic Horizons : Aspects of the Sublime in English Romantic Poetry and Painting, 1770-1850* (Columbia : Univ. of Missouri Press, 1983), p.147参照。
- 6 到達不可能性と空間における深淵のイメージの関連については Thomas Weiskel, *The Romantic Sublime : Studies in the Structure and Psychology of Transcendence* (Baltimore : Johns Hopkins Univ. Press, 1976), pp. 24-25参照。
- 7 Georges Poulet, *Trois Essais de Mythologie Romantique* (Paris : Corti, 1971), pp.155-56 参照。
- 8 太母をはじめとするノイマンの理論については Erich Neumann, *The Origins and History of Consciousness*, trans. R.F.C. Hull, (Princeton : Princeton Univ. Press, 1954) 参照。
- 9 神話上サーシが太母にあたることについては Neumann, p.61および p.83参照。
- 10 森の意味するところについては C. G. Jung, *Symbols of Transformation: An Analysis of the Case of Schizophrenia*, trans. R. F. C. Hull, (Princeton : Princeton Univ. Press, 1956), p.274および Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, 2nd. ed. (Amsterdam : North Holland, 1976) の “wood” と “forest” の項を参照。
- 11 この点については Morris Dickstein, *Keats and His Poetry : A Study in Development* (Chicago : Univ. of Chicago Press, 1971), p.110参照。
- 12 この場面のエンディミオンの自体愛については Stuart M. Sperry, *Keats the Poet* (Princeton : Princeton Univ. Press, 1973), p.110参照。
- 13 ロマン派の上昇螺旋のバタンについては M. H. Abrams, *Natural Supernaturalism : Tradition and Revolution in Romantic Literature* (New York : Norton, 1971) 参照。
- 14 他者への超越の問題はキーツ後期の物語詩において再び取り上げられる。この点については拙論「超越の眼差し」参照。